

「手を叩かれない役」

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

病院は待ち時間が長いのでいつも1冊の本を持って行く。今は亡き歌舞伎の名人、板東三津五郎と演劇評論家の対談集で『芸のこころ』という本を読んだ。なぜこの本が目についたのかわからないが運命の出会いだろう。いつ購入したか忘れてしまったが、何か役に立つヒントがあるだろうという直感で購入し、長い年月書棚の陰に隠れていた本である。

歌舞伎とスポーツ(バスケットボール)、何らつながるところがないように思われるが、ところがどっこい、あらゆるところにヒントが隠され、あらゆることが共通の原理・原則で営まれていることを改めて確認させられた。下記はこの本の中の一節である。

*評論家：「映画『東京オリンピック』を見てぼくは感動したよ。それは何だといったら、競技じゃなかったんだな。オリンピックでは、みんなメダルをとった奴のことばかりがクローズアップされるけど、あれ、そうじゃないんだな。競技が終わった後に、道具を片づけたり、次の競技のための地ならしをしたり、雨が降ってくりゃ、泥まみれになりながらその次の用意をする裏方がいるのね。そこへ選手というスターが登場する。そういう裏方が始まりにも、終わりにもいつもその陰にいる。そういう裏方がいたために、オリンピックができたんだね。だから何か特定の人だけがオリンピックの榮譽をさらうべきものじゃないんだ」

*板東：「芝居だってそうですよ。たとえば、いまやっている芝居で手を叩かれるのは主役の役だけです。しかし、あの主役の役が手を叩かれて引っ込むためには、ぼくなんぞの端役が、一生懸命やっておいてやんなきゃ駄目なのよ。」

*評論家「前ごしらえをね、まわりがね」

*板東：「もしぼくが、ほめられるところはねえんだからと気を抜いたら、芝居は駄目になってしまう。手を叩かれる役と叩かれない役というのは最初から決まっているんだから、その手を叩かせるようにまわりがしなきゃいけないんだ」

*評論家：「手を叩かれない役の人のほうが多いのね。ところが、その努力のほうが強い、そういうものが強ければ強いほど、いい芝居になるということね」

福島のプロバスケットボールチーム「ファイヤーボンズ」もようやく勝利の女神に恵まれるようになってきた。ホームコートゲームもこれからは常時1千人2千人以上の観客が入場するようになるだろうか。実はこの会場設営や試合当日の会場補助員が大変だ。

前回、猪苗代のカメリーナで行われたホームゲームでは猪苗代高校バスケットボール部員の協力で試合がスムーズに運営された。プレーヤーは素晴らしいプレーで手を叩かれたが、会場を設営した猪苗代高校バスケットボール部の裏方仕事も忘れてはいけない。

一般のバスケットボール活動も同じ。選手のがんばりには手を叩かれるが、毎日の練習で体育館の窓を開けたり、水を用意したり、器具を準備したりして練習環境を設定してくれる人たちの存在を忘れてはいけない。ゲームも同じ。得点をとる人たちだけが手を叩かれがちであるが、そこに適切なパスをした人、そこまでボールを運んでくれた人、そして、落としたシュートに身体を張ってリバウンドにとびこんだ人の努力も同じである。

手を叩かれない人の存在に思いを寄せ、感謝をしながら全力投球しなければならない。